

日韓両言語の程度副詞と共起する名詞について — 「程度大」を表わす語を中心に —

金 賢珍

1. はじめに

日本語と韓国語は、多方面から対照研究が行われてきたが、副詞に注目した研究はあまり見られない。これは、両言語とも副詞の研究が他の分野に比べ遅れていることと、副詞の問題は辞書的な対応関係の問題に過ぎず、第二言語習得においてそれほど難しくないと認識されていたからだと思われる。本稿で分析対象とする日本語と韓国語の程度副詞についても、同じことが言えよう。

程度副詞は、日韓両言語とも次の例(1)のように形容詞、動詞、副詞を修飾するのが基本的用法であるといわれてきた。例(1a)は「楽しさ」、例(1b)は「疲れ」、例(1c)は「はつきりさ」の程度をそれぞれの程度副詞が強調している。

- (1)a. たいへん楽しい。/대단히 즐겁다.
 b. とても疲れた。/몹시 피곤하다.
 c. かなりはつきり言う。/꽤 분명하게 말하다.

一方、例(2a)の「昔」「옛날」をはじめ、例(2b)の「疑問」「의문」、例(2c)の「勉強」「공부」というように程度副詞の後ろに名詞が続く場合もある。

- (2)a. かなり昔のことだ。/꽤 옛날 일이다.
 b. はなはだ疑問だ。/매우 의문이다.
 c. とても勉強になる。/아주 공부가 되다.

しかし、なぜこのような名詞が程度副詞と共起するのだろうか。名詞の前に置かれた程度副詞が修飾する対象は何であるのだろうか。本稿では、日本語と韓国語の程度副詞と共起する名詞に焦点を絞って考察していく。

2. 先行研究および本稿の分析方法

程度副詞と共起する名詞に関する研究をみると、日本語については、山田(1936)以来、程度副詞が「方向、距離、関係、数量」などを表わす名詞を修飾するということはよく知られている。その他、佐野(1997)が「旧式、細目、新型、…」のような名詞と程度副詞との共起について論じている。一方、韓国語については、名詞が程度副詞の修飾を受けるためには、叙述名詞の状態動詞的性質(서정수(1975))や名詞の程度性(손남익(1995))が要求されるという指摘はあるが、日本語のように具体的な名詞を取り上げ、程度副詞と名詞の関係について論じたものは見当たらない。

日韓両言語の従来 of 指摘は、単に「程度副詞が名詞を修飾するかしないか」という指摘に止まっており、程度副詞と名詞の共起の十分な説明になっていない。程度副詞と名詞の共起関係を説明するためには、次のような問題を検討してみる必要がある。程度副詞がどのような名詞を修飾するのか、程度副詞に修飾される名詞が文中でどのような機能を果たしているのか。つまり、例(2a)～例(2c)の違いは何であるかを検討することによって、程度副詞が名詞を修飾するということをどのように捉えるべきかを考察する必要がある。そのような検討を通じて、日韓両言語の程度副詞のよりの確な対応関係を示す方法を探ることができると考えられる。本稿では、寺村(1968)に基づき、程度副詞と共に現れる名詞を、例(2a)のような「相対関係を表わす名詞」、例(2b)のような「属性、状態を表わす名詞」、例(2c)のような「動作性などを表わす名詞」に分けて、両言語の程度副詞と名詞との共起関係について考察する。

3. 考察対象とする語と言語資料

3.1 考察対象とする語

本稿では、日本語と韓国語の程度副詞のうち程度が大きいことを表わすものを中心に分析する。程度大を表わす語といっても様々なものがあるが、日本語の『分類語彙表』(1964)に基づき、最も中心的であると判断される17語を取り上げる。韓国語の程度副詞は、日韓辞書に基づき、日本語の17語に対応するものを取り上げることにする。日本語と韓国語の考察対象語は以下の通りである。

表 1. 考察対象とする日韓両言語の程度大を表わす語

日本語	至って、大いに、かなり、極めて、結構、ごく、随分、頗る、相当、大層、だいぶ、大変、とても、なかなか、甚だ、非常に、よほど、
韓国語	굉장히, 극히, 꽤, 너무, 대단히, 더없이, 많이, 매우, 몹시, 상당히, 심히, 아주, 엄청, 적어, 제법, 지극히, 썩

表 1 の韓国語は、韓国語の『現代国語使用頻度調査』(2002) によれば程度副詞の中でも最も高い頻度で使われる語であり、程度を表わす中心的な語である。

3.2 言語資料

事柄の程度性を判断しそれを表現するということには、主観的な視点が入りやすい。それゆえ、できるだけ多くの実例に基づいて考察することが重要である。¹ そこで、本稿ではできるだけ多くの資料を集めるため、コーパスを利用する。しかし、必要に応じて作例を使う場合もある。本稿で用いた資料は以下の通りである。

表 2. 本稿で使用した言語資料²

日本語	①『講談社新書』等 49 刊行物 ②『男はつらいよ』シリーズ 48 本分のシナリオ ③『毎日新聞』1995 年～1999 年の記事 ④CD-ROM 版新潮文庫 100 冊の中、日本作家による作品 67 冊
韓国語	연세한국어말뭉치 7. 1, 367 万語節 (内訳：総類、哲学、宗教、社会科学、芸術、文学、歴史学)

4. 程度副詞と共起する名詞

4.1 相対関係を表わす名詞

ここで、程度副詞と共起する名詞としては、他との比較によって成立する相対関係を表わす語を取り上げる。主として空間的、時間的、数量的な関係を表わす語であり、次のようなものがある。

日本語：上、下、前、後ろ、後、以前、先、一部、少数、少量、多くなど
 韓国語：위(上), 아래(下), 앞(前), 뒤(後ろ), 후(後), 전(前、先), 일부
 (一部), 소수(少数), 소량(少量)など

この相対関係を表わす名詞の特徴として程度副詞と共起できるということが指摘されてきたが、なぜ程度副詞の修飾を受けることができ、文中でどのように機能するかについて見る。

- (3)a. 木の机 = 나무의 책상(나무 책상)³
 b. 先生のカバン = 선생님의 가방(선생님 가방)

(3a)の「木」と(3b)の「先生」は、連体格助詞「の」を介して後続の「机」と「カバン」の性質と所属を表わしている。一方、(4a)の「木」と(4b)の「先生」は連体格助詞「の」を介して後続の「下」と「前」を判断する基準となって位置関係を示している。

- (4)a. 木の下 = 나무의 아래(나무 아래)
 b. 先生の前 = 선생님의 앞(선생님 앞)

言い換えれば、後項の名詞の意味は前項の名詞が判断基準を提供することによって、はじめて意味が限定されることになる。したがって、後項の名詞は何を基準にするかによる他との関係や比較によって意味が成り立つ相対的な性質をもつものである。この点は、(3a)の「机」と(3b)の「カバン」といった具象名詞と異なる。ここで、例(3)と例(4)の「木」と「先生」の代わりに程度副詞を入れてみると次のようになる。

- (5)a. * かなりの(木/カバン) * 꽤의 (나무/가방) [* : 非文]
 b. * かなりの(下/前) * 꽤의 (아래/앞)
 c. かなり(下/前) 꽤 (아래/앞)

程度副詞は、(5a)のように相対的な性質を持たない具象名詞とも、(5b)のように相対関係を表わす名詞であっても、連体格助詞「の」を介しては共起できな

い。しかし、(5c)のように、程度副詞は相対関係を表わす名詞のすぐ前に置かれて修飾関係を結んでいる。つまり、例(6)の「以前」と「아래」(下)のように「程度副詞+名詞」という名詞句の形で修飾が行われている。

(6) a. 大分以前から直腸がんを自覚していた。

b. 배가 꽤 아래로 흘러 내려와 있었다.

(船がかなり下に流れてきていた。)

一方、同様に時間、空間を表わす「昨日(어제)」「ここ(여기)」などは、次のように連体格助詞の存在にかかわらず程度副詞の修飾を受けることができない。

(7) a. * かなり (昨日/ここ)

* かなりの (昨日/ここ)

b. * 꽤 (어제/여기)

* 꽤의 (어제/여기)

このような名詞は、ある基準によってその意味が決定される性質を持つものであるが、いったん決められてしまえばそのつど一定の時間や空間を絶対的に示すことになり、そこには意味上の程度性は存在しない。このように、意味が相対的に決められる名詞であっても、一定絶対的な性質によって程度副詞の修飾は受けることができないと考えられる。このことは、次の例(8)と例(9)の「上」と「下」の場合でも見られる。

(8) a. 上の階は私が使い、下の階は姉が使います。

b. * かなり上の階は私が使い、かなり下の階は姉が使います。

(9) a. 英会話教室で姉は上のレベルで、私は下のレベルです。

b. 英会話教室で姉はかなり上のレベルで、私はかなり下のレベルです。

「上」と「下」に「かなり」のような程度副詞を付けると、例(8b)は非文になるが、例(9b)は自然な文になる。これは、例(8a)は「上」に対して「下」、「下」に対して「上」という反対概念を基準として、位置関係を指しているだけであるのに対して、例(9a)の「上」と「下」は何を基準にするかによってレベルの高低の判断が変わり、そこには程度副詞によって修飾される幅というものが生じてくるためである。同様なことが韓国語に対しても言える。程度副詞の修飾

を受けられるのは、同じ時間、空間、数量を表わす名詞であっても、基準によって変異しうる概念を表わす場合に限られる。

このような相対的な名詞が程度副詞の修飾を受けて文中でどのような機能を果たすかを見ると、例(10)のように主語となったり、例(11)のように目的語となったり、例(12)のようにその他の格助詞を伴って他の語と種々の格関係を結んだり、あるいは、例(13)のように副詞的に使われたりする。

- (10) a. 日中関係は 2000 年を超え、そのごく一部が不幸な経過をたどった。
 b. 이 단순한 사실을 인류가, 그것도 아주 일부가 깨달은 것은 최근의 일이다.
 (この単純な事実を人類が、それもごく一部が悟ったのは最近のことである。)
- (11) a. 無党派層がかなり多くを占め、また私と同じ年代の人たちはほとんどが無関心。
 b. 세상일의 크히 일부분을 알면서 모두 아는 척하고 있을 뿐이니까.
 (世の中のことのごく一部分しか知らないのに、全てわかっているふりをしているだけなのだから。)
- (12) a. 大分前から地方出版社を見る尺度を私なりに決めました。
 b. 오늘 처음 보건만 아주 전부터 익숙하게 알고 있던 것 같은 친숙한 ~。
 (今日はじめて見たのにかなり前から慣れていたような親しんだ~。)
- (13) a. かなり前、講義を読んで感銘を受けた。
 b. 졸업한지 아주 오랫동안 서로 못만났어요.
 (卒業してからずっと長い間お互いに会えませんでした。)

また、程度副詞に修飾される相対名詞は、例(14a)に変化表現の「-になる」が付いたり、例(14b)と例(14c)のように判定詞⁴「だ」や「이다」が付いたりして述語として機能することもある。

- (14) a. ずいぶん後になって発見があった。
 b. 高射砲がさく裂したのはかなり下だった。

- c. 밖에서 여자를 데리고 들어오는 경우는 있기는 하지만 극히
소수였다.

(外から女を連れてくる場合もあるが、ごく少数であった。)

以上のように、「程度副詞＋相對名詞」の結合は、日韓いずれの言語においても一つの名詞句として文中で機能を果たしている。

4.2 属性、状態を表わす名詞

次のような名詞もまた、程度副詞と共に用いられることがある。これらはものの性質や様子、つまり、その属性や状態を表わす名詞である。

日本語：疑問、問題、好評、評判、人気、普通、金持ち、勉強家、美人、怠け者、負担、怒り、苦心、異例など

韓国語：의문(疑問), 문제(問題), 호평(好評), 인기(人気), 보통(普通), 고급(高給), 중상(中傷), 부자(金持ち), 마보(ばか), 후회(後悔), 실망(失望)など

日本語の場合、これらの語が「ナ形容詞」の語幹ではなく名詞であることは、寺村(1982)による次のような判断基準のいずれにも合致することから明らかである。

- ・ 様態を表わす「-そうだ」をとらない
- ・ 連体形「な」の形をとりにくい
- ・ 名詞化の接尾語「-さ」がつきにくい

この類の語は一応名詞の仲間に入るが、意味的には事柄の属性、状態を表わす形容詞的な性質を持ったものである。この類の語が程度副詞と共起して文中でどのように機能するかをしてみる。ここで取り上げる語は次の例のように主語にも、目的語にも、あるいは、判定詞と結び付いて述語にもなれる。

- (15) a. 疑問が大きい。/의문이 크다.
b. 刺激を受ける。/자극을 받다.
c. 彼は金持ちだ。/그는 부자다.

しかし、例(16)のように、これらの名詞の前に程度副詞を置いて「程度副詞＋名詞」の構造にすると、日本語でも韓国語でも共に非文になる。

- (16) a. * [甚だ疑問] 大きい。 / * [몹시 의문] 이 크다.
 b. * [かなり刺激] を受ける。 / * [꽤 자극] 을 받다.
 c. * 彼は [とても金持ち] だ。 / * 그는 [아주 부자] 이다.

ただし、例(16a)～(16c)のような語の結合は必ずしも非文ではない。「甚だ」「かなり」「とても」「몹시」「꽤」「아주」が後続の名詞を修飾するのではなく、次の例(17)に示すように、その名詞と用言からなる構造全体にかかる解釈すれば適格な文である。そのため、例(17a)と例(17b)の程度副詞を用言の前に移動しても自然な文が成り立つ。

- (17) a. 甚だ [疑問が大きい]。 / 몹시 [의문이 크다] .
 疑問が甚だ[大きい]。 / 의문이 몹시 [크다] .
 b. かなり [刺激を受ける]。 / 꽤 [자극을 받다] .
 刺激をとても[受ける]。 / 자극을 꽤 [받다].
 c. 彼はとても[金持ちだ]。 / 그는 아주 [부자이다] .

特に、例(17c)の程度副詞が名詞の前に置かれた場合でも、「とても」「아주」が修飾するのは、「金持ち」「부자」という語ではなく、「だ」や「이다」がついた「金持ちだ」「부자이다」という表現全体の程度を限定している。言い換えれば、属性、状態を表わす名詞であっても、程度副詞の修飾を受けられるのは、「名詞＋だ」や「名詞＋이다」という形式で述語として機能している場合である。つまり、「金持ちだ」は「お金が多い人だ」という意味だが、程度副詞が修飾するのは「人」ではなく「多い」という状態的な意味ということになる。実際の用例を見ても、属性や状態を表わす名詞が程度副詞と共起するのは、「だ」や「이다」という判定詞を伴う場合が多い。

- (18) a. 在韓米軍の戦闘参加を米国民が支持するかどうかはなはだ疑問だ。
 b. 고작 장사꾼에 불과한 저한테 너무 과찬이십니다.
 (たかが物売りに過ぎない私にはあまりにも過ぎたお言葉です。)

- (19) a. 礼子は二十二歳、山本は少佐の四年目で三十歳、かなり晩婚であった。
 b. 뼈 부러진 곳은 없는 것 같습니다만, 상당히 중상입니다.
 (骨が折れたところはありませんが、相当重傷です。)

例(18)と例(19)においても、「甚だ」「너무」「かなり」「상당히」が修飾するのは、「疑問」「과찬」(ほめすぎ)「晩婚」「중상」(重傷)という語ではなく、後ろの「だ」や「이다」と結び付いて「疑問だ」「과찬이다」(ほめすぎだ)「晩婚だ」「중상이다」(重傷だ)という一つの用言化された全体を修飾するのである。これは、鈴木(1972)も指摘しているように、名詞のもっている属性、状態の意味が表されるのは、述語として機能する場合であり、その際、程度副詞との共起が可能になる。韓国語の場合についても최현배(1929)に同様の指摘がなされている。⁵

属性、状態を表わす名詞が程度副詞と共起する場合は他にもある。例えば、例(20)のように「名詞+になる」や「名詞+이 되다」のような変化表現で用いられる場合とか、例(21)のように「名詞+らしい」⁶や「名詞+같다」のような形式で用いられる場合にも、程度副詞の修飾を受けることができる。

- (20) a. 棟田と一緒に練習しているのがとても刺激になった。
 b. 우리는 김 선생이 너무 무리해서 쓰러질까봐 몹시 걱정이 되었다.
 (私たちは金先生があまり無理して倒れるかととても心配になった。)
 (21) a. 沢田さんて人はとても人格者らしいね。
 b. 그에 비하면 동숙은 자신이 너무 바보 같다고 느껴졌다.
 (彼に比べるとドンシュクは自分があまりにも馬鹿らしく感じられた。)

このような表現においては、名詞と後続要素の結び付きが緊密で、両者の間に他の要素が入る余地はほとんどない。そのため、程度副詞が修飾するのは「人格者らしい」の「人格者」の程度ではなく、「人格者らしい」全体の「らしさ」の程度を限定しているのである。同様に、「바보같다」(馬鹿らしい)の「바보

(馬鹿)の程度ではなく、「馬鹿らしさ」の程度が限定されているのである。つまり、これらの名詞は、名詞として程度副詞の修飾を受けるのではなく、それに後続する要素と一体になり、それが一つの用言化された形式として程度副詞の修飾を受けると考えねばならない。このため、程度副詞と結合とした属性、状態を表わす名詞は、文の主語、または目的語といった機能を果たすことができないのである。

しかし、日本語においては、属性、状態を表わす語が程度副詞の修飾を受け、文の主語、目的語として機能する場合がある。

- (22) a. また豪州から緊急輸入された抗毒血清にかなりの効果があることも確認された。
 (또 호주에서 긴급수입된 항독혈청에 상당한 효과가 있는 것도 확인되었다.)
- b. 都会の方々も、森林の管理に相当の負担をすべきだ。
 (도회지의 사람들도 산림의 관리에 상당한 부담을 가져야한다.)
- c. 現在の自分に、よほどの自信がなければ書けないからである。
 (현재의 자신에게 웬만한 자신이 없으면 쓸 수 없기 때문이다.)
- d. もちろん、その歴史分析にもなかなかの冴えが見られる。
 (물론, 그 역사분석에도 꽤 명석한 능력이 엿보인다.)

例(22)は、「効果」「負担」「自信」「冴え」という属性、状態を表わす語が程度副詞の修飾を受けながら、格助詞を付けて主語、目的語として使われている場合である。ただし、この場合には、必ず程度副詞と名詞の間に連体格助詞「の」を必要とする。これは本稿の考察対象語の全ての語に見られるのではなく、主として「かなり」「相当」「よほど」「なかなか」の4語に見られる現象である。⁷ 韓国語には日本語の「程度副詞+の+名詞」に直接対応する形式がないため、(22a)～(22c)のように「形容詞連体形+名詞」と対応したり、(22d)のように「程度副詞+形容詞連体形+名詞」といった形式で対応したりする。このように、属性、状態を表わす名詞が程度副詞と共に文中で名詞として働くためには、日本語においては、連体格助詞「の」を、韓国語においては、形容詞連体形という形式を必要とする。

以上、程度副詞の修飾を受ける属性、状態を表わす名詞は、名詞の範疇に属

されても、4.1 の相対関係を表わす名詞のように直接程度副詞と結合して各種の格助詞を伴い名詞としての機能を果たすことはできない。属性、状態を表わす名詞は後ろに「だ」「-になる」「らしい」「이다」「-이 되다」「같다」などの表現を伴い、一つの用言化された形式で程度副詞の修飾を受ける。つまり、属性、状態を表わす名詞が程度副詞と共起する際は、名詞としての性質より形容詞的な性質による修飾関係を結んでいる。

4.3 動作性および量性を表わす名詞

次に程度副詞と共起する名詞として取り上げるのは、「する」「하다」がついて動詞に転化する名詞や「-になる」「-이 되다」がついて状態的意味が生じる名詞である。具体的には次のようなものがある。

日本語：運動、勉強、参考、世話、話題、力、お金、人、時間など
 韓国語：운동(運動), 공부(勉強), 참고(参考), 화제(話題), 힘(力), 돈(お金), 사람(人), 시간(時間)など

このような語は、例(23)に示すように、4.1、4.2 で取り上げた名詞と同様、単独で主語や目的語として、あるいは「名詞+だ」「名詞+になる」「名詞+이다」「名詞+이 되다」の形式で述語としても用いられる。

- (23) a. 勉強は面白い。/공부는 재미있다.
 b. 勉強をサボる。/공부를 게을리하다.
 c. これも勉強だ。/이것도 공부이다.
 d. これも勉強になる。/이것도 공부가 되다

程度副詞との共起関係では、4.2 の属性、状態の意味を表わす名詞と同様に、程度副詞が修飾する対象を名詞だけに限定すると、例(24)のようにいずれも非文になる。しかし、程度副詞の修飾範囲を名詞ではなく述語にまで拡大すると、例(25c)を除いては正文として成り立つ。

- (24) a. * [かなり勉強] は面白い。/* [꽤 공부] 는 재미있다.
 b. * [かなり勉強] をサボる。/* [꽤 공부] 를 게을리하다.

- c. * これも [かなり勉強] だ。/*이것도 [꽤 공부] 이다.
 d. * これも [かなり勉強] になる。/*이것도 [꽤 공부] 가 되다
- (25) a. かなり [勉強は面白い]。/ 꽤 [공부는 재미있다] .
 b. かなり [勉強をサボる]。/ 꽤 [공부를 게을리하다] .
 c. * これも [かなり勉強だ]。/*이것도 [꽤 공부이다] .
 d. これも [かなり勉強になる]。/이것도 [꽤 공부가 되다] .

日韓いずれの言語においても、例(25c)のように、「名詞+だ」「名詞+이다」の場合は程度副詞によって修飾できない。これは、4.1、4.2 で取り上げた名詞が、判定詞「だ」や「이다」をつけた形式で程度副詞の修飾を受けることができたこととは異なる。一方、例(25d)のように「名詞+になる」「名詞+이 되다」の場合は程度副詞と共起可能である。このことを実例でみると、次のようである。

- (26) a. 特に木曜日の「一流サラリーマンの国語講座」はとても勉強になります。
 b. 사업이래야 대단한 것은 아니었지만, 제법 돈은 되는 일인 모양이었습니다.
 (事業といっても大したものではなかったが、かなりお金にはなるみたいです。)

例(26a)の「勉強」は後ろの「-になる」と結合して「役に立つ」という意味に、例(26b)の「돈」(お金)は「-이 되다」と結合して「돈벌이가 되다」(儲かる)という意味を表わす。そこで、例(26a)の「とても」は「どれぐらい役に立つか」に関して、例(26b)の「제법」(かなり)は「どれぐらい儲かるか」に関してその程度を修飾していることになる。言い換えれば、程度性を持たない語が変化表現「-になる」「-이 되다」と結合することによって、基準によって変異し得る形容詞的な性質が生じ、程度副詞の修飾を受けることができるのである。もし、後ろの変化表現を判定詞「だ」や「이다」に入れ替えると、次のように非文になる。

- (27) a. * 特に木曜日の「一流サラリーマンの国語講座」はとても勉強だ。

- b. * 사업이래야 대단한 것은 아니었지만, 제법 돈이다.
 (事業といっても大したものではなかったが、かなりお金だ。)

「勉強」や「돈」(お金)のような名詞は、判定詞と結び付いて「勉強だ」や「돈이다」(お金だ)となっても、単に特定の具象名詞であることを指定するだけで、程度性を持った形容詞的な意味は生まれない。したがって、程度副詞によって修飾することができない

以上、4.1では相対的な関係を表わす名詞が格助詞を伴って文中で用いられ、4.2では属性、状態を表わす名詞が判定詞、接尾語を伴って程度性をもつ述語として用いられたりすることを見た。しかし、4.3でみたように相対的な意味も基準によって変化する意味も持たない名詞は、4.1、4.2のような使用はできず、「名詞+になる」「名詞+이 되다」の結合の全体が一つの用言化された形式で程度副詞の修飾を受ける。

5. おわりに

以上、日本語と韓国語における程度大を表わす程度副詞と名詞との共起について考察した。その共起の様相は日韓両言語間でよく似ていることが確かめられた。その結果をまとめると次の通りである。

	格助詞			述語		
	主語	目的語	その他	だ/이다	になる/이 되다	らしい/답다
相対名詞	○	○	○	○	○	
属性、状態名詞	* (日)	* (日)		○	○	○
動作性、量性名詞					○	

日韓いずれの言語においても、名詞のうち、相対関係を表わす名詞は程度副詞と名詞が結合して完全な名詞句構造を持ったまま程度副詞の修飾を受けることができる。一方、属性、状態を表わす名詞の一部は後続する判定詞、接尾語、変化表現と結合することにより、また、動作性、量性を表わす名詞の一部は変化表現だけと結合することにより、その全体が一つの用言化された形式として程度副詞の連用修飾を受けるようになる。しかし、上の表の「*」のように、日本語の「かなり」「よほど」「相当」「なかなか」の4語は、一部の名詞と連体格

助詞「の」を介することにより、完全な名詞句構造内での連体修飾機能を果たす場合もある。韓国語はこのような修飾構造を持たないため、形容詞の連体形を利用した修飾構造で処理するしかない。本稿では、程度副詞のうち程度大を表わす主要なものに考察対象を限った。その結果は程度副詞全般についてもある程度当てはまるものと考えられるが、程度副詞の性質の全体像を明らかにすることは今後の課題としたい。

注

- 1 野間(1990)によると、「現代語において一つ一つの単語の実際の性質を明らかにするためには言語資料の質はもちろんのこと、(量)が重要である。ある程度の量の言語事実の観察によって初めて、例えば確率の記述など、言語事実のよりリアルな記述も可能となる」と言語資料の量と質の重要性について言及している。
- 2 資料は、文体による影響を考慮し、小説の会話文とシナリオの話し言葉、新聞記事、論説文などの書き言葉の両面から収集した。
- 3 日本語の連体修飾「名詞+の+名詞」に対応する韓国語の連体修飾には「친구인 지우 (友達であるジウ：名詞+인(である)+名詞)」、「선생님의 가방 (先生のカバン：名詞+의(の)+名詞)」、「선생님 가방 (先生カバン：名詞+名詞)」の3つのパターンがある。
- 4 「だ」は学校文法などでは助動詞として扱われるが、名詞と結合して述語を作る点を重視し判定詞とみなす。韓国語の「이다」は指定詞とも言うが、本稿では両言語とも判定詞と称する。
- 5 최현배(1929)は、名詞は単独に程度副詞の修飾を受けることができず、名詞の後ろに判定詞「이다(だ)」を伴うことによって名詞の性質を表わすことにより、はじめて程度副詞の修飾が受け得ると述べている。
- 6 ここで取り上げている「らしい」は判断を表わす助動詞「らしい」ではなく、接尾語として名詞の性質を表わす「らしい」のことである。
- 7 本稿の考察対象語の程度大を表わす語の中でなぜこの4語に「程度副詞+の+名詞」の形式が集中して表れるのかについては今後の課題として残しておく。

参考文献

- 井上和子(1976)『変形文法と日本語 上』大修館書店
 国立国語研究所(1964)『分類語彙表』秀英出版
 佐野由紀子(1997)「程度副詞の名詞修飾について」『大阪大学日本学報』16号
 大阪大学文学部日本学研究室 pp. 121-132
 鈴木重幸(1972)『日本語文法・形態論』むぎ書房
 寺村秀夫(1968)「日本語名詞の下位分類」『日本語教育』12号 pp. 42 - 57
 (1982)『日本語のシンタクスと意味 I』くろしお出版

- 野間秀樹 (1990) 「現代朝鮮語の名詞分類—語彙論・文法論のために」
『朝鮮学報』第 135 輯 朝鮮学会 pp. 1 - 59
- 矢澤真人 (1989) 「修飾語と並立語」『講座日本語と日本語教育 4』明治書院
- 山田孝雄 (1938) 『日本文法学概論』寶文館
- 李翊燮・李相億・蔡琬 (2004) 『韓国語概説』梅田博之監修 大修館書店
- 국립국어연구원 (2002) 『현대국어사용빈도조사』
- 서 정수 (1975) 「국어 부사류의 구문론적 연구」『동방학지 12』 pp. 197 - 221
- 손 남익 (1995) 『국어부사연구』박이정
- 정 희정 (2000) 『한국어 명사 연구』한국문화사
- 최 현배 (1929) 『우리말본』정음문화사